

アイトラッカーによる

いけばなの伝統をふまえた新しい華展方略の検証

加藤藍^{*1}, 卯木輝彦^{*2*3}, 谷田貝雅典^{*3}

*1 共立女子大学大学院文芸学研究科, *2 フォトロン, *3 共立女子大学文芸学部

Verification of a New Flower Exhibition Strategy Based on the Tradition of IKEBANA by Eye Tracker

Ai Kato^{*1}, Teruhiko Unoki^{*2*3}, Masanori Yatagai^{*3}

*1 Graduate School of Arts and Letters, Kyoritsu Women's University, *2 Photron Limited, *3 Faculty of Arts & Letters, Kyoritsu Women's University

あらまし：華道・茶道などの日本の伝統文化は高齢化や若者の伝統文化離れにより会員数が減少し継承が困難になりつつある。一方、華道（いけばな）は歴史の中で衰退期には時代に合わせてその在り方を変えてきた経緯がある。よって歴史を踏まえた新しい華展として、他分野とのコラボレーション華展やWEB華展を企画し試行した。各華展の評価にはアイトラッカーを用いた客観的な鑑賞時注視点の解析と、質問紙調査による鑑賞時の主観評価を行い、新しい華展方略について考察した。結果、各作品の推奨作風傾向やそれぞれに効果的な展示方術を得た。

キーワード：いけばな, アイトラッカー, 質問紙調査, 多変量解析

1. はじめに

平成27年度、令和2年度の文化庁の報告⁽¹⁾⁽²⁾より、日本の伝統文化の華道・茶道において、高齢化や若者の伝統文化離れにより会員数が減少し継承が困難になりつつあることが示されている。加えて、2020年からの世界的パンデミックにより、対面習得が原則の芸道は伝承困難な局面を迎えた。芸道のなかでも特に華道は新鮮な植物を扱うことから、習得、制作、展示のどの過程においても、長期間を要することができない特性上、現在の時勢から大きな難局に至っている。

一方、明治時代の文明開化によって一時衰退の危機に陥った華道が復興をとげた要因は、今まで床の間に飾っていたものを洋風の建物の中でも飾れるように新たな型を考案し、生け方を増やしたためである⁽³⁾。なお、文明開化による衰退以前にも、飛鳥時代から続くいけばなは、その長い歴史の中で、幾度か時代と共にふさわしい型を考案し変容することで、時代に合った新しい在り方を増やしてきた経緯がある。

本研究ではいけばなの歴史を踏まえ、現代という時代に応じた新しい在り方を試行し評価考察する。

華道の各流派のなかで、池坊が最も歴史が古く、主要流派であることから、本論では特に断らない場合は池坊流派に即し記述する。なお、筆者は華道家（華道家元池坊いけばな教授）である。

また、一般に同義とされる「いけばな」と「華道」の表記については、「花を立てる」「いける」ことを一般的に「いけばな」と定義し、その中でも特に「池坊専応口伝」⁽⁴⁾によって説かれた「いけばな」に対する仏教精神性と技術理論を極めようとする、求道的な「いけばな」を「華道」と定義することから、本稿では特に断らない場合は、以降広義の意味である「いけばな」と表記する。

2. いけばなの歴史とコラボレーション

いけばなの起源は古く、その起源は仏前に供える花、供花であったと言われている⁽⁵⁾。飛鳥時代538年の

仏教伝来と共に仏前の供物のひとつとして伝わった。以降、905年に奏上された「古今和歌集」や1001年ごろ完成したとされる「枕草子」などには新たに花瓶に花を挿してある様子が書かれ、供花の在り方とは別に鑑賞の在り方が見られるようになった。「碧山日録」の1462年2月25日の記述には池坊専慶が挿した花が見事であった旨が記され、花を挿すこと自体に関心が向いている様子が記されている。室町時代には書院造と呼ばれる建築様式が登場し、武家社会を中心に生活空間の中で招いた客人をもてなす工夫がなされ、部屋に花を飾る習慣が広まった。また、壁間に仏画などの掛け軸をかけ、押し板（後の床の間）に香炉、供花、燭台の三つ具足を置いた供花の新たな様式が整えられた。

1530年ごろには「池坊専応口伝」⁽⁴⁾にて、ただ挿しただけの花をあまりよしとしない考えが新たに説かれ、いけばなに対する哲学が登場した。池坊専応が「立花」という生け方を理論的に整備し精神性を説いたことで、当時の「立花」は池坊の独占的かつ専門的なものとなり求道的な「華道」が成立した。

江戸時代に入ると収入の安定した町人の間で素人が趣味として芸能を楽しむ遊芸が流行り、江戸中期には「立花」より容易な「生花」という生け方が新たに登場する。また数寄屋造と呼ばれる建築様式の登場も「生花」の成立に影響した。

江戸時代後期には幕府による財政改革で贅沢が禁じられ、当初いけばなや長唄、浄瑠璃などが取り締まりを受けた。しかし、いけばなは儒教の精神を取り入れたことにより、宗教的な教えを説くためのものとして、後に幕府に奨励されるようになった。また、江戸後期以前は主に男性が行うものであったいけばなは、次第に女性が行う教養としての側面が強まったこともこの時代の大きな特徴である。

明治維新後は、文明開化に伴う生活の西洋化でいけばなは衰退の危機に見舞われた。江戸中期の「生花」の登場で池坊から派生した様々な流派が登場し、宗教的な教えを説くものとして幕府からの庇護を受け発展期にあったいけばなであったが、倒幕により幕府の庇護がなくなったことや、明治政府による廃仏毀釈の影響で著しく衰退した。しかし、明治時代中期には欧化主義に反対する国粹主義が登場し、1879年教育令が公

布された後、池坊専正は京都府から女学校で「華道」を教えるようにと依頼を受けるに至った。また、1887年文部大臣であった森有礼によって婦女子教育の方針が打ち出され、いけばなは女性の教養としての位置づけがなされた。

大正時代には、西洋の花を用いることのできる「盛花」が小原雲心によって考案され、従来の「立花」や「生花」に比べ自由な表現ができるようになった。これを受け保守的であった池坊も「応用花」（現代の「自由花」）として、新たに受け入れた。

昭和敗戦後、伝統的な考えやものを否定する思想が盛んになり、いけばなにおいてもこれまでの自然主義に反した前衛いけばなが登場した。前衛いけばなでは、これまで前提としての型であった「自然の姿」から脱し、花器以外で生花と同列に鉄鋼物や石膏などの無機素材が用いられ、新しい近代的ないけばなが試みられるに至った。

3. 研究目的

3.1 現代いけばなの試み

現在のいけばなは、様々な分野との前衛的なコラボレーションが実現している。例えば、図1に示す「デジタル枯山水」⁽⁶⁾は、プロジェクションマッピングといけばなの共演で、龍生派創流130周年記念展「RYUSEI IKEBANA JAPAN」(2016)にて展示され、「リアルとバーチャルの融合」をテーマに、いけばなのある空間にプロジェクションマッピングを投影する新しい華展が試みられた。そのほかにも京都北野天満宮で開催された「KYOTO NIPPON FESTIVAL」(2018)では、伝統文化とポップカルチャーのコラボレーションとして、北野天満宮所蔵の重要文化財「鬼切丸」と、「刀剣乱舞・ONLINE」作品でこれを擬人化



図1 デジタル枯山水⁽⁶⁾

したキャラクターの共演を、池坊がいけばな作品として演出した意欲的な展示も登場している。

このような試みは近年新たに登場したものであり、これらの中から、やがていけばな文化として定着した華展が登場すれば、現代いけばなの大きな難局を乗り越える可能性があり、これらが新しい華展方略となりえるのか、検証する余地があると考えられる。

3.2 先行研究の試み

先行研究⁽⁷⁾では、様々な分野とコラボレーションをする現在のいけばなの在り方に対する人々の認識を明らかにするために、質問紙調査を行い多変量解析の後、考察した。結果、いけばなは伝統文化として古風であるという認識があるために、いけばなと他分野とのコラボの試みに対して否定的になることがわかった。さらに「アニメ・ゲームとのコラボ拒否感」因子について、舞台上で音や光を交えながら行ういけばなのデモンストレーション的パフォーマンスへの否定感が大きく、いけばな経験や知識の有無を問わず、全体的にいけばななどの新しい試み（コラボレーション）に対して否定的であることがわかった。

3.3 本研究の試み

先行研究⁽⁷⁾をふまえ、斬新な異分野とのコラボレーションを検討する際は、いけばなの文化としての印象を十分考慮する必要がある。また、大きな難局であるいけばなの存続を考慮するうえでも、これまでの歴史的な試みを再度十分検討したうえで、いけばな文化を新しいステージに昇華できる新たな試みを検証する必要がある。

以上をふまえ、本研究では歴史上の伝統的なコラボレーション、現代的で斬新なコラボレーション、先行研究⁽⁷⁾をふまえ近現代のかつ伝統的でいけばななどの文化的相性が良いと考えられるコラボレーションの3つを検討し、これらの作品の鑑賞実験を行い、いけばな文化にとって有効と考えられる華展方略を検証することを目的とする。なお、鑑賞実験では先行研究⁽⁷⁾との比較を可能とするため、アンケートによる主観データの取得と、新たに鑑賞時の客観データとして、どこを見ているのか鑑賞時の視線解析が行えるアイトラッカーによる、注視点データを取得し、両データを多

変量解析により分析し、これらの因果関係を統計的に明らかにする。

4. 実験方法

4.1 いけばなとの他分野とのコラボレーション概要

4.1.1 「いけばな」と「掛け軸」

芸道のなかでも三道（茶道・華道・書道）として、古くから親和性があり、2章で述べた室町時代に成立した「いけばな」と「掛け軸」のコラボレーションを実施する（以下「いけばな×掛け軸」と称す）。

「いけばな×掛け軸」は、図2に示すような、床の間での飾りを想定し、白雪燕氏の書の掛け軸と生花正風体一種生けのいけばなとなる。生花正風体は正面から鑑賞し、「数少なきは心深し」という省略美や、命の出発点である水際と花材の曲線美から出生美を感じるのが鑑賞時のポイントである。また、花材同士や作品全体の余白から空間美を感じることもポイントとなる。

よって「いけばな×掛け軸」は3.3節の伝統的なコラボレーションに相当する。

4.1.2 「いけばな」と「キャラクターパネル」

3.1節で取り上げた現代的なコラボレーションの内、3.2節の先行研究⁽⁷⁾で明らかとなった否定感の大きかったアニメ・ゲームキャラクターとのコラボレーションを試みる（以下「いけばな×キャラクターパネル」と称す）。

「いけばな×キャラクターパネル」は、図3に示すように、3.2節の先行研究結果をふまえ、否定感を軽減する工夫として、展示する「いけばな」との統一感、および、キャラクターの印象が先立たない様に、徐晨蕊氏に依頼しオリジナルのキャラクターパネルを準備した。本作品は、華展会場での展示を想定し、キャラクターイメージに合わせた自由花を机上に置き、鑑賞時には作者が伝えたいことを感じることや表現方法を見つけることがポイントである。また本来、表現方法は様々で、自然的表現・象徴的表現や、垂直・傾斜形態・水平形態、非対称的構成・放射的構成、花器、色、質感、形状など多様となる。

よって「いけばな×キャラクターパネル」は3.3節の現代的で斬新なコラボレーションに相当する。



図 2 いけばな×掛け軸



図 3 いけばな×キャラクターパネル



図 4 いけばな×折り紙

4.1.3 「いけばな」と「折り紙」

3.2 節の先行研究⁽⁷⁾結果を踏まえ、いけばなどの文化的相性がよいと考えられる分野として、古くて新しい「折り紙」をコラボレーション対象とした(以下「いけばな×折り紙」と称す)。折り紙は江戸時代に普及した日本の手芸であるが、近年では「Origami」として世界大会が開かれるなど、前衛的な芸術へと昇華した。

「いけばな×折り紙」は、図 4 に示すように、華展会場での展示を想定し、杉山秀美氏に制作していただいた折り紙作品と、そのテーマに合わせた自由花を共に机の上に配置して展示した。

鑑賞時には、自由花であることから「いけばな×キャラクターパネル」と同様に、作者が伝えたいことや多様な表現方法を認知することがポイントである。

よって「いけばな×折り紙」は 3.3 節の先行研究をふまえ近現代のかつ伝統的でいけばなどの文化的相性が良いと考えられるコラボレーションに相当する。

4.2 展示方法

4.2.1 実物展示

実物展示はいけばなの展示でもっとも一般的な展示方法であり、華展(または花展)と呼ばれる。主に百貨店や美術館などの屋内で行われ、壁を背景にして台の上に作品が並ぶ。一般的に作品の邪魔にならないように、壁や台は白や黒で統一される。作品前には席札(瓶者の職位や名が書かれた名札)や花材のメモが置かれる。実物展示では作品のスケールや奥行きが感じられる。

4.2.2 WEB 展示

WEB 展示は、応募し投稿されたいけばな作品の写真を WEB 上で公開する近年誕生した新たな華展である。特に COVID-19 の影響によって相次いで実物華展が中止となり、本来華展は日頃の稽古の発表の場でもあることから、機会を失わないよう WEB 上で公開す

る機会が増えた。WEB サイトはもとより、Facebook、YouTube など媒体は様々で、作品の写真にはなるべく背景に作品以外を映さないということ以外、まだ、特段のルールすら決まっていないのが現状である。

WEB 展示では、作品ごとに名前や花材だけではなく作者のコメントも掲載できる。ただし、2 次元画像であるために作品のスケールや奥行きは伝わりづらいたことが、実物展示との大きな相違点である。

4.3 測定方法

本実験では 3 つのコラボレーション華展を同時に行った。いけばなは長期保管が利かないことから実施は複数回に分けて行い、各作品の生け方を「生花」と「自由花」で統一した。実物展示では「いけばな×掛け軸」は床の間を想定し制作し、他 2 つの作品は一般華展の展示を想定し制作した。WEB 展示用写真は COVID-19 の影響で昨今急増した WEB 華展を想定し撮影した。

被験者は、共立女子大学の学生および教職員 38 名にご協力いただき、図 2 から図 4 に示す 3 種類のコラボレーション華展における実物展示と、これらを写真撮影し WEB 鑑賞を想定した WEB 展示の、計 6 回の鑑賞実験に参加いただき、のべ 195 回分(被験者外実験計画)の鑑賞データを取得した。

鑑賞注視点測定は Tobii Pro X2-30 と X2-60 により行った。実物展示は図 5 のような環境で行い、被験者の視界範囲を図 5 中の WEB カメラで撮影し、アイトラッキングデータを取得した。WEB 展示は鑑賞用ノ



図 5 注視点測定図
(実物展示「いけばな×折り紙」の例)

ート PC のモニター上に作品を表示し、モニター下部にアイトラッカーを設置してアイトラッキングデータを取得した。

作品鑑賞後には、41 項目 5 段階評定尺度の鑑賞後アンケートを実施した。

5. 結果および考察

5.1 AOI の設定と注視点の分析方法

各実施環境・作品ごとに図 6 に示す色分けされた AOI (Area of Interest) を設定し、設定範囲内の注視時間を Tobii Studio (ver3.2.1) により解析した。なお、図 6 の WEB 展示「いけばな×折り紙」を例に、各 AOI の設定を概説する。「全体」領域は図 6 のオレンジ領域とし記録画面内全てを設定した。「いけばな作品領域」は花器を含め図 6 のパープル領域を設定した。

「コラボ作品領域」は図 6 のグリーンとブルー領域のように設定した。なお、以上 3 領域の「全体」から「いけばな作品領域」と「コラボ作品領域」を演算で引いた領域を「作品外領域」に設定した。

以上とは別に「推奨鑑賞点」として、いけばな（池坊）で指導する作品の鑑賞ポイントを、図 3 のパープル領域内にさらに色分け（レッド、グリーン、など 5 か所）をして設定した。この「推奨鑑賞点」は、作品理解を図るためのもので、池坊では生花正風体においては出生美を表す水際の部分、自由花においては作品の主眼構成とメインの花の部分指すものである。

以上、5 つの AOI を設定し、鑑賞実験時の各 AOI の注視割合は、各領域の注視時間を「全体」の注視時間で除算し百分率 (%) で表した。

5.2 鑑賞後アンケートの因子分析

鑑賞後アンケート (41 項目 5 段階評定尺度) の自由

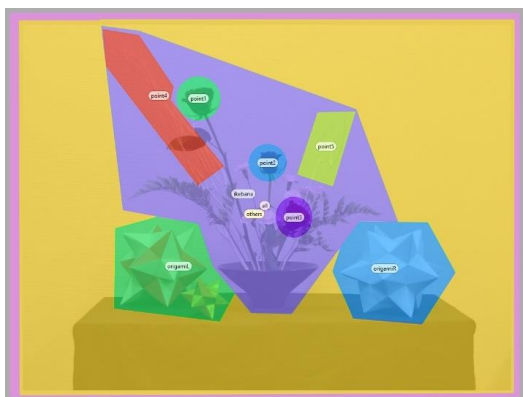


図 6 WEB 展示「いけばな×折り紙」の AOI

表 1 鑑賞後アンケートの因子分析結果

	I	II	III	IV	V
31作品は洋風な感じでしたか	.927	.063	.079	-.138	-.077
逆34作品は和風な感じではなかったですか	.840	.017	-.113	-.033	-.048
25作品は華美なものでしたか	.757	.105	.195	-.001	.131
10作品は大胆でしたか	.734	-.162	-.101	-.034	.295
32作品は人工的でしたか	.634	.008	-.067	-.112	-.022
逆9作品は質素なものではなかったですか	.628	.092	.042	.089	.140
逆29作品は伝統的ではなかったですか	.604	-.021	-.354	.032	-.089
12作品は明るい雰囲気でしたか	.602	.003	.130	.433	.074
28作品は斬新でしたか	.594	-.057	-.219	.144	.199
逆39作品は自然的ではなかったですか	.492	-.034	-.326	-.187	-.141
逆27作品は繊細ではなかったですか	.481	-.067	-.222	.025	-.247
40作品は存在感がありましたか	.414	-.201	.131	-.016	.389
逆11作品はまっすぐではなかったですか	.336	.139	-.101	-.171	-.151
20作品はいけばなが主役でしたか	.060	.943	-.108	.015	.216
16作品はいけばなが中心と感じましたか	.048	.939	-.114	-.038	.203
逆37作品はいけばな以外のものが主役ではなかったですか	.054	.889	.076	.019	-.220
逆15作品はいけばな以外が中心と感じなかったですか	-.030	.856	-.021	.030	-.112
35作品はいけばなが目立ちましたか	.004	.782	.026	-.036	.140
逆41作品はいけばな以外のものが目立たなかったですか	-.025	.779	.101	.074	-.298
33作品は芸術として受け入れられますか	.094	-.093	.867	-.051	.037
24作品はいけばな文化として受け入れられますか	.096	.020	.838	-.096	-.037
26作品は伝統文化として受け入れられますか	-.242	-.001	.721	.017	-.041
36作品は美しいと感じましたか	.160	.053	.680	-.093	.168
38作品は全体的に統一感がありましたか	-.259	-.084	.451	.082	.107
17作品はあたたかい雰囲気でしたか	.027	.000	.023	.797	.119
逆18作品はつめたい雰囲気ではなかったですか	.219	-.014	-.006	.791	-.036
13作品はやわらかい雰囲気でしたか	-.295	.037	-.151	.663	.141
逆30作品は鋭い雰囲気ではなかったですか	-.234	-.055	-.233	.547	-.226
逆14作品は暗い雰囲気ではなかったですか	.422	-.036	.091	.492	.005
23作品は親しみやすいものでしたか	.215	.144	.147	.377	.284
22作品から季節を感じられましたか	.122	-.079	.093	.157	.338
21作品はなびっていましたか	-.070	.115	.013	.288	.302
19作品は興行きがあると感じましたか	-.019	.169	.116	-.054	.250
因子間相関	I	II	III	IV	V
I	—	-.238	-.515	.408	-.011
II		—	.351	-.061	.121
III			—	-.052	.375
IV				—	.102
V					—

因子抽出法：最尤法（プロマックス回転解）

記述項目および環境選択項目等の 8 項目を省いた、計 33 項目に対して SPSS (Ver28.0.1.0) により、最尤法・プロマックス回転（斜交回転）を用い、因子分析を行った。因子抽出後の累積寄与率は 56.5% となり、得られた 5 因子構造の結果を表 1 に示す。なお、分析後、負の因子負荷量となった項目には表 1 の各項目の前に「逆」と記し、逆転項目の処理を行った。

5 つの因子名は、構成する項目から判断し、第 1 因子を「前衛的芸術評価」、第 2 因子を「いけばな主眼度」、第 3 因子を「伝統的芸術評価」、第 4 因子を「作品柔軟度」、第 5 因子を「四季・空間美」と命名した。以上 5 因子は以後、鑑賞主観評価因子と総称する。

なお、表 1 の因子間相関から、「前衛的芸術評価」と「伝統的芸術評価」の相関が「-0.515」と最も大きく負の相関であったことから、これらの因子が本研究における重要な総合評価因子であることがわかった。

5.3 各展示における鑑賞主観評価因子と「推奨鑑賞点」

展示毎の各作品展示の鑑賞主観評価因子の因子代表平均値と比較のための分散分析結果を図 7, 9 に示す。また、同鑑賞時の「推奨鑑賞点」AOI 注視割合の

分散分析と多重比較結果を図 8, 図 10 に示す. なお, 各結果については 5.6 節で総合的に記す.

5.4 前衛的／伝統的芸術評価への他の鑑賞主観評価因子への規定因 (重回帰分析結果)

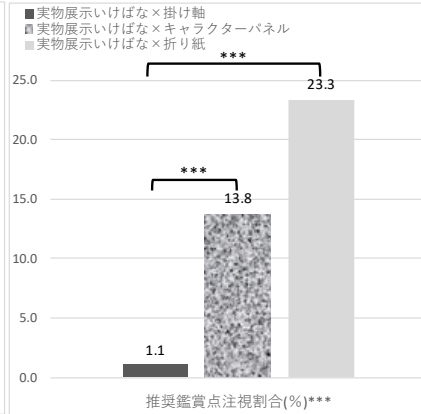
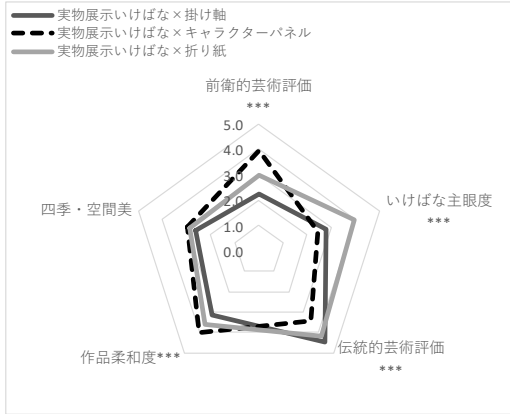
5.2 節において重要な因子であった「前衛的芸術評価」と「伝統的芸術評価」を従属変数とし, 他の鑑賞

主観評価因子を独立変数とした重回帰分析を行った.

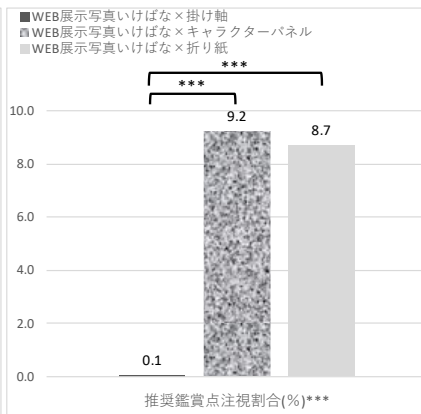
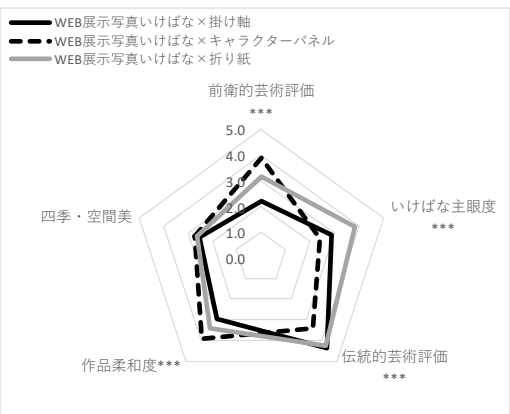
従属変数を「前衛的芸術評価」とした重回帰分析結果を表 2, 従属変数を「伝統的芸術評価」とした重回帰分析結果を表 3 に示す. なお, 各結果については 5.6 節で総合的に記す.

5.5 各作品で前衛的／伝統的芸術評価へ最も規定力のあった鑑賞主観評価因子への各 AOI の規定因 (重回帰分析結果)

5.4 節の結果より各作品の「前衛的芸術評価」と「伝統的芸術評価」に対し高い規定因を示した各鑑賞主観評価因子において, これらを規定するものは作品中のどの部分にあるのか明らかにするために, 「いけばな主眼度」「作品柔和度」「四季・空間美」を従属変数とし, 5.1 節で設定した各 AOI から算出した鑑賞時注視割合を独立変数として, 作品ごとに重回帰分析を行った. 「前衛的芸術評価」に対し高い規定因を示した各鑑賞主観評価因子への結果をまとめたものを表 4, 「伝統的芸術評価」について同様にまとめたものを表 5 に示す. なお, 各結果については 5.6 節で総合的に記す.



有意確率 †p<0.1,*p<0.05,**p<0.01,***p<0.001
図 7 実物展示因子代表値の比較 図 8 実物鑑賞時の推奨点注視割合



有意確率 †p<0.1,*p<0.05,**p<0.01,***p<0.001
図 9 WEB 展示因子代表値の比較 図 10 WEB 鑑賞時の推奨点注視割合

表 2 「前衛的芸術評価」への鑑賞主観評価因子の規定因 (重回帰分析)

	前衛的芸術評価											
	実物展示			WEB展示写真								
	いけばな×掛け軸		いけばな×キャラクターパネル		いけばな×折り紙							
	β	B	β	B	β	B						
いけばな主眼度	-0.065	(-0.026)	-0.207	(-0.104)	-0.281†	(-0.199)	0.083	(0.043)	-0.304	(-0.176)	-0.135	(-0.122)
作品柔和度	0.221	(0.096)	0.053	(0.044)	-0.518**	(-0.358**)	0.267	(0.122)	0.083	(0.070)	-0.121	(-0.103)
四季・空間美	0.254	(0.101)	0.043	(0.021)	-0.079	(-0.041)	0.166	(0.068)	0.010	(0.005)	-0.229	(-0.194)
自由度調整済みR ²	0.087		-0.034		0.323**		0.016		-0.007		-0.007	

強制投入法 β 標準化偏回帰係数(B偏回帰係数)

有意確率 †p<0.1,*p<0.05,**p<0.01,***p<0.001

表 3 「前衛的芸術評価」への鑑賞主観評価因子の規定因 (重回帰分析)

	伝統的芸術評価											
	実物展示			WEB展示写真								
	いけばな×掛け軸		いけばな×キャラクターパネル		いけばな×折り紙							
	β	B	β	B	β	B						
いけばな主眼度	0.216	(0.130)	0.067	(0.069)	0.201	(0.147)	0.179	(0.155)	0.052	(0.056)	-0.054	(-0.046)
作品柔和度	-0.104	(-0.069)	0.295†	(0.505†)	0.351*	(0.250*)	-0.093	(-0.070)	0.130	(0.202)	0.483*	(0.386*)
四季・空間美	0.153	(0.093)	0.487**	(0.474**)	0.064	(0.034)	0.349	(0.236)	0.279	(0.237)	-0.059	(-0.047)
自由度調整済みR ²	-0.034		0.358***		0.110†		-0.010		0.013		0.127	

強制投入法 β 標準化偏回帰係数(B偏回帰係数)

有意確率 †p<0.1,*p<0.05,**p<0.01,***p<0.001

表4 「前衛的芸術評価」へ最も規定力のあった「鑑賞主観評価因子」への各AOI注視割合の規定因

	四季・空間美	作品柔和度	いけばな主眼度	作品柔和度	作品柔和度	いけばな主眼度	四季・空間美
	実物展示	実物展示	実物展示	実物展示	WEB展示	WEB展示	WEB展示
	いけばな× 掛け軸	いけばな× 掛け軸	いけばな× キャラクターパ ネル	いけばな× 折り紙	いけばな× 掛け軸	いけばな× キャラクターパ ネル	いけばな× 折り紙
	β	β	β	β	β	β	β
いけばな作品領域	-0.595*	0.188	0.693*	-0.409	-0.106	0.461	0.520†
コラボ作品領域	-0.339	0.145	0.182	-0.197	-0.358	-0.173	-0.071
作品外領域	0.162	0.172	0.272	0.375†	0.230	0.151	0.026
推奨鑑賞点	0.083	0.117	-0.046	0.415*	0.159	0.194	0.032
自由度調整済みR ²	0.128†	-0.066	0.206*	0.429***	0.110	0.489***	0.211†

強制投入法 β 標準化偏回帰係数(B偏回帰係数) 有意確率†p<0.1,*p<0.05,**p<0.01,***p<0.001

表5 「伝統的芸術評価」へ最も規定力のあった「鑑賞主観評価因子」への各AOI注視割合の規定因

	いけばな主眼度	四季・空間美	作品柔和度	四季・空間美	四季・空間美	作品柔和度
	実物展示	実物展示	実物展示	WEB展示	WEB展示	WEB展示
	いけばな× 掛け軸	いけばな× キャラクターパ ネル	いけばな× 折り紙	いけばな× 掛け軸	いけばな× キャラクターパ ネル	いけばな× 折り紙
	β	β	β	β	β	β
いけばな作品領域	0.547*	0.469	-0.409	-0.326	0.493	-0.513†
コラボ作品領域	0.107	0.327	-0.197	-0.188	0.273	-0.267
作品外領域	0.093	0.451*	0.375†	-0.067	0.156	-0.518*
推奨鑑賞点	-0.158	-0.232	0.415*	0.049	-0.018	0.106
自由度調整済みR ²	0.082	0.077	0.429***	-0.075	-0.053	0.055

強制投入法 β 標準化偏回帰係数(B偏回帰係数) 有意確率†p<0.1,*p<0.05,**p<0.01,***p<0.001

5.6 新しい華展方略について

5.3節から5.5節までの結果より、特徴的な値を華展方略として表6にまとめる。表6の①は5.3節の結果から、実物/Web両展示における各作品が前衛的作風と伝統的作風のどちらに向いているのかをまとめた。表6の②は5.3節の結果から、「推奨鑑賞点」を比較的に見ることができているのかをまとめた。表6の③は5.4節の結果から、「前衛的芸術評価」(5.4節表2)と「伝統的芸術評価」(5.4節表3)を高めるためには鑑賞主観評価因子のどれを強調または控えるように展示すべきかをまとめた。表6の④は、③の結果を受けて、強調または控える各鑑賞主観評価因子を具体的にどのように表現するのか、制作指針が分かるように、5.1節で設定した各AOI注視割合を独立変数とし、5.5節の結果から、「前衛的芸術評価」(5.5節表4)グループと、「伝統的芸術評価」(5.5節表5)グループごとに、どのような作業をすればよいのかをまとめた。

5.6.1 実物展示の華展方略

表6①より、いけばな×掛け軸は伝統的作風、いけばな×キャラクターパネルは前衛的作風に向き、いけばな×折り紙はどちらの作風にも向いていた。②・③・

④より、前衛的作風において、いけばな×掛け軸は作品内に余白を多くとり、いけばな×キャラクターパネルはいけばなを目立たないようにし、いけばな×折り紙は「推奨鑑賞点」を控えつついけばなを目立たせる必要がある。伝統的作風において、いけばな×掛け軸はいけばなと「推奨鑑賞点」を目立たせ、いけばな×キャラクターパネルはいけばなを目立たせ余白を多くとり、いけばな×折り紙はいけばなを控えつつ「推奨鑑賞点」を目立たせる必要がある。

5.6.2 WEB展示の華展方略

表6①より、いけばな×掛け軸は伝統的作風、いけばな×キャラクターパネルは前衛的作風に向き、いけばな×折り紙はどちらの作風にも向いていた。②・③・④より、前衛的作風において、いけばな×掛け軸は他分野を目立たないようにし、いけばな×キャラクターパネルはいけばなを目立たないようにし、いけばな×折り紙もいけばなを目立たないようにする必要がある。伝統的作風において、いけばな×掛け軸はいけばなを目立たないようにし、いけばな×キャラクターパネルはいけばなを目立たせ、いけばな×折り紙はいけばなを目立たせ余白を減らすように寄せて撮影する必要がある。

表 6 新しい華展方略

		実物展示			WEB展示		
		いけばな×掛け軸	いけばな×キャラクターパネル	いけばな×折り紙	いけばな×掛け軸	いけばな×キャラクターパネル	いけばな×折り紙
①	5.3節 図7,図9	2.2*** (有意に低く向いていない)	3.9 前衛的作風向き	3.0 前衛的/伝統的 どちらの作風も可	2.2*** (有意に低く向いていない)	3.9 前衛的作風向き	3.2 前衛的/伝統的 どちらの作風も可
	5.3節 図7,図9	4.4 伝統的作風向き	3.4*** (有意に低く向いていない)	4.2	4.4 伝統的作風向き	3.4*** (有意に低く向いていない)	4.2
②	5.3節 図8,図10	1.1%*** (有意に低く「推奨鑑賞点」をみれていない) 伝統的作風の場合「推奨鑑賞点」を強調する	13.8%	23.3%	0.1%*** (有意に低く「推奨鑑賞点」をみれていない) 伝統的作風の場合「推奨鑑賞点」を強調する	9.2%	8.7% 実物展示(23.3%)よりも「推奨鑑賞点」を強調する
③	5.4節 表2	「四季・空間美」(β 0.254)と「作品柔和度」(β 0.221)が同程度に高い規定因 ∴本因子を強調する	「いけばな主眼度」(β 0.207)が最も高く負の規定因 ∴本因子を控える	「作品柔和度」(β 0.518)が最も高く負の規定因 ∴本因子を控える	「作品柔和度」(β 0.267)が最も高い規定因 ∴本因子を強調する	「いけばな主眼度」(β 0.304)が最も高く負の規定因 ∴本因子を控える	「四季・空間美」(β 0.229)が最も高い規定因 ∴本因子を控える
	5.4節 表3	「いけばな主眼度」(β 0.216)が最も高い規定因 ∴本因子を強調する	「四季・空間美」(β 0.487)が最も高い規定因 ∴本因子を強調する	「作品柔和度」(β 0.351)が最も高い規定因 ∴本因子を強調する	「四季・空間美」(β 0.349)が最も高い規定因 ∴本因子を強調する	「四季・空間美」(β 0.279)が最も高い規定因 ∴本因子を強調する	「作品柔和度」(β 0.483)が最も高い規定因 ∴本因子を強調する
④	5.5節 表4	「四季・空間美」の向上には「いけばな作品領域」(β -0.595)を控える 「作品柔和度」の向上には「いけばな作品領域」(β 0.188)と「作品外領域」(β 0.172)を目立たせる ∴作品内にしっかりと余白空間をとる	「いけばな主眼度」を控えるには「いけばな作品領域」(β 0.693)を控える	「作品柔和度」を控えるには「推奨鑑賞点」(β 0.415)を控え「いけばな作品領域」(β -0.409)を目立たせる	「作品柔和度」の向上には「コラボ作品領域」(β -0.358)を控える	「いけばな主眼度」を控えるには「いけばな作品領域」(β 0.461)を控える	「四季・空間美」の向上には「いけばな作品領域」(β 0.520)を控える
	5.5節 表5	「いけばな主眼度」の向上には「いけばな作品領域」(β 0.547)を目立たせる	「四季・空間美」の向上には「いけばな作品領域」(β 0.469)と「作品外領域」(β 0.451)を目立たせる	「作品柔和度」の向上には「推奨鑑賞点」(β 0.415)を目立たせ「いけばな作品領域」(β -0.409)を控える	「四季・空間美」の向上には「いけばな作品領域」(β -0.326)を控える	「四季・空間美」の向上には「いけばな作品領域」(β 0.493)を目立たせる	「作品柔和度」の向上には「作品外領域」(β -0.518)と「いけばな作品領域」(β -0.513)を控える

盤研究 (C) (課題番号: 19K03091) の補助によるものです。

6. おわりに

本研究では「前衛的芸術評価」と「伝統的芸術評価」や注視傾向から、各コラボレーション作品の推奨作風や効果的な展示方略を得た。

今後は、若者のいけばなへの参入を促すため、実物展示に比べ時間や場所を選ばず気軽にアクセスできるWEB展示に着目し、COVID-19以降も、実物展示と並行して積極的にWEBを活用していくために、静止画のみならず動画やVR等の動的WEB展示環境の整備や調査など、さらなる新しい華展方略が課題となる。

謝辞

実験にご協力いただいた共立女子大学の皆さん、白雪燕氏、徐晨蕊氏、杉山秀美氏、数馬綾香氏、村上鈴果氏、五十嵐琴音氏、池坊文和会支部近藤総光先生に深く感謝致します。

また、本研究は令和元年度 科学研究費補助金 基

参考文献

- (1) 平成 27 年度伝統的生活文化実態調査事業報告書 https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tok_eichosa/dentotekiseikatsu_jittai/index.html 最終閲覧 2022/2/20
- (2) 令和 2 年度生活文化調査研究事業報告書(華道) https://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tok_eichosa/seikatsubunka_chosa/index.html 最終閲覧 2022/2/20
- (3) 北條明真:「いけばなとは何か 北條明真著作集 1」, 至文堂, 1997 (文献初出 1964, 角川新書)
- (4) “池坊専応口伝”, 池坊いけばな資料館所蔵
- (5) 池坊雅史:「いけばな池坊 歴史読本」, 日本華道社, 2016
- (6) 「デジタル枯山水」龍生派 130 周年記念展「RYUSEI IKEBANA JAPAN」(2016)
- (7) 加藤藍, 永岡慶三, 米谷雄介, 卯木輝彦, 林幹夫, 谷田貝雅典:「いけばな(華道)とマルチメディア・コラボレーションに関する考察」, 第 44 回教育システム情報学会全国大会講演論文集, pp.135-136, 2019